

序章

現代の宗教学〔Religionswissenschaft あるいは History of Religion(s)〕が一貫して追究してきた学問の目標は、人類史におけるさまざまな宗教現象の「統合的理解」である¹。その理解は、多様な文化と、それぞれの歴史の文脈を通して現れる諸々の宗教現象を、宗教現象以外の諸要素に還元して説明することを避け、「それ自体の指示の次元」で捉え了解していくことである。また、その「統合的理解」は、普遍的構造の宗教現象学的な把握と、個々の現象が現れる歴史的な文脈での理解という二つの方向から取り組まれる。すなわち、宗教現象の普遍と特殊からの全体的把握が目指されるのである²。

宗教学が個々の宗教現象における宗教体験を理解する場合、「宗教は独自のもの」であるとする解釈学的前提がある。宗教現象は宗教現象として解釈されなければならないとする宗教研究における宗教学独自の視座は、ここから生じてくる。聖なるものとその宗教体験をそれぞれの歴史的文化的諸要素へ還元することは、宗教現象を宗教現象たらしめている重要な要素、つまり、もっとも把握されなければならない聖の要素を見失うことになるのである。

この解釈学的前提、もしくは宗教現象へのアプローチは、宗教学という学問の人間規定と深く結びついている。たとえば、人間の聖なるものの体験に関して、「聖なるものは人間の意識の構造の一要素であって、意識の歴史の一段階ではない」³としたエリアーデは、宗教学を包括的な人間学として位置づけ、人間存在をホモ・レリギオスス (*homo religiosus*) とした。この視点は、宗教学の方法論的基礎をなしていた、宗教を「独自のもの」とする解釈学的前提と結びつきながら、宗教学における人間存在の探究に深い奥行きをもたらすことになる。人間を宗教的なるものとする前提においては、「人間的であると考えられる生活は、それ自身において宗教的行為」を意味することになり、食糧収集、

¹ 荒木美智雄、『宗教の創造』、法蔵館、1987年、130頁。あるいは See, Joseph M. Kitagawa, *The History of Religions: Understanding Human Experience*, Atlanta and Georgia, Scholars Press, 1987, p.29.

² エリアーデの言葉を用いれば、宗教学は「一方では、歴史的で具体的なものに立脚し、他方で歴史を通して宗教的データが、どのように歴史を越えたものを顕わしているかを解読」しようとするのである。Mircea Eliade, *Shamanism: Archaic Techniques of Ecstasy*, Translated from the French by Willard R. Trask, Princeton University Press, 1974(1951), p.xv.

³ エリアーデ、『世界宗教史』、荒木美智雄他訳、筑摩書房、1991年、i頁。

性生活、仕事なども象徴的価値をもつことになる⁴。したがって、宗教学を志すものにとって、他の諸学において経済学的、社会学的、文学的な文脈などで説明される現象、とりわけ聖に関する人間の体験を、宗教現象として把握し直し、その意味を解読することが課題となってくるのである。これが、宗教学は宗教の意味の探求であると同時に人間存在の探究の学であるとされる所以である。

筆者もまた、上記の宗教学の課題を自らの課題として受けとめている。それゆえ、沖縄の宗教的伝統における中心の象徴と神話的世界を解釈していこうとする本稿は、この宗教学の課題を基礎にして進められる。このような宗教学の課題を前提とした視座に立つとき、沖縄の宗教現象全体は、世界の宗教現象と通底する人間存在の宗教性を示すひとつの例として、また人類の重要な遺産として捉えることができるのである。

沖縄の宗教現象は一地域の事例であり、その研究はエリア・スタディのひとつの領域にすぎないというのが一般的認識である。このような認識から、沖縄はすでに研究し尽くされていてこれ以上どこを調査すればいいのか、という声がしばしば聞かれる⁵。人類学や民俗学の学問的蓄積からすれば、現代的状況を背景とした宗教研究をのぞけば、あるいは沖縄は研究し尽くされているのかもしれない。しかし、宗教学の立場からすれば、諸学による沖縄の宗教研究は、沖縄の宗教的伝統における様々な宗教現象を宗教現象として「それ自体の指示の次元」から理解されてきたものではなかったし、先述した宗教学的課題を背景になされたものではなかった。宗教学の側からの沖縄の宗教研究は、一部の研究を除けば、まだほとんどなされてきていないといわざるをえない。諸学による宗教的データを体系的な研究として統合的に理解することが宗教学の課題であることからすれば、沖縄の宗教現象の宗教学的研究はこれから本格的にはじめられるべき状況であると筆者は考えている⁶。

⁴ エリアード、前掲書、同。

⁵ 例えば、沖縄の民俗（宗教）研究を牽引してきた一人である桜井徳太郎は「今では未だに着手されない島を探そうとしても苦勞するほどに調査は普及し、多くの報告や論考が公刊されている」（桜井徳太郎、「八重山における近代化と民衆宗教の変容」『宗教研究』第71巻312、1997年所収、4頁）としている。それゆえ社会科学的調査は、現代的状況から生じるあらたな問題を見出すのに必死である。また、民俗学的研究は、より細部へと調査を進めるか歴史的な文化を伝播の探索や比較へと関心を移すか、または、あらたな現代的伝統の創造過程を民俗現象として捉えなおしていくかという方向を模索している状況であるといえる。

⁶ このような沖縄の宗教研究の現状認識に基づきながら桜井徳太郎などは次のように述べている。

本稿の沖縄の宗教的伝統における御嶽と神歌の考察は以上述べてきたことを基本的認識としながらとりくまれる。沖縄の宗教研究全体と本稿の方法論については後にまた論じることにはしたい。

本研究は、上記の宗教学の基本的視座に基づきながら、沖縄の宗教的伝統における聖なる空間としての御嶽の中心のシンボリズムと、その聖なる中心で行われてきた祭祀、すなわち神歌の儀礼における始源的存在論を宗教学の視点から統合的に理解しようとする試みである。

御嶽の問題は、沖縄の「宗教文化」研究において、中心的問題のひとつでありつづけてきた。しかし、その研究の多くは、宗教現象としての御嶽を社会的機能や「文化事象」あるいは「民俗」の諸概念へと還元するものであった。本研究はこれらの先行研究の批判的検討をふまえ、宗教現象それ自体の地平から理解する解釈学的立場に立って、御嶽における聖の顕現の構造、中心のシンボリズム、空間のオリエンテーションといった御嶽の構造を把握し、同時に村落の聖なる中心の歴史的展開を考察しながら、御嶽を中心とした空間構成が、世界像の範型として王朝の都市空間へと展開していくことを考察する。

御嶽の中心の象徴が沖縄の宗教的伝統における、いわば、空間論を構成するとすれば、その聖なる中心を常に聖なる中心たらしめていた儀礼は時間論を構成することになる。その儀礼の主要部をなすのが神歌である。本稿では、この神歌を従来の文学研究の枠ぐみから切り離し、神話として捉え、御嶽の中心の構造を支える「始源的存在論」と、それにささえられた人間の世界内における宗教的存在様態を明らかにしていく。

上記の考察全体のなかから明らかにしていこうとするのは、沖縄の宗教史全体を一貫して根底から支えてきた宗教的伝統の中心的構造である。

「沖縄の宗教の研究は、いわゆる沖縄学の研究が異常な進展を遂げて余りにも専門化したかゆえに、多くの諸要因や多面的な立地条件を検討し総合的な把握をこころみ、その全体像をつかむという志向や努力を怠ってきたように思われてならない。換言すれば、各の専門学問の枠内に限定された範囲内の調査であり研究であって、それを超えるインテグレートな学的作業を敢行する勇気にかけていた。それが近時の沖縄学に硬直化をもたらすにいたった一因かと思われる」(桜井、前掲論文、3頁)。

このことからこれまでの沖縄研究を統合する視座が今こそ必要とされていることが理解できるであろう。

本論文の構成は以下ようになる。

第一章では、先行研究の検討から対象の考察へと入る前に、沖縄の宗教研究全体を宗教学の立場から捉えた場合、何が問題となってくるか、そしてどのような課題が見出されるかについて論じ、その課題に向けられる方法論を提示する。

まず、本章前半では、近代の言説批判から起こる民族（俗）誌の危機を取り上げ、それを沖縄の研究に当てはめて問題の所在を明らかにしていく。そこでは、「特殊領域」として認識されてきた沖縄の宗教研究の志向性を検討し、その問題点を「沖縄学」、「南島」などの言説のなかから明らかにしていく。そして後半では、明らかにされた沖縄の宗教研究の志向性とその問題をふまえ、方法論を提示する。そこでは「解釈学的状況」、「宗教現象の独自性」、「形態学」、「構造的普遍と歴史的特殊の解釈学的循環」が本稿における方法論を構成する中心的事項として述べられる。

第二章においては、沖縄の宗教的伝統における歴史的・文化的特殊性についての考察を行う。本章ではまず、沖縄の宗教的伝統を成立させてきた根本的な要素である自然的・地理的条件を考察したうえで、歴史的・文化的特殊性を「一元的意味世界」、「象徴の非象徴的理解」、「人と神の連続性」、「女性の宗教性」、「歴史的現在の神話化」などの諸点において考察する。

第三章では、最初に、これまでの御嶽研究の盲点と問題点が批判検討される。そして先行研究に欠けていた聖なる空間の普遍的構造を確認したうえで、聖なる空間と中心の体験を史料をもとに解釈し、その体験の意味を明らかにし、同時に、史料の中に見出される御嶽における「石」、「木」の象徴について考察していく。

第四章では、前章までで明らかにされた体験に支えられた御嶽の中心の構造からもたらされるオリエンテーションと、中心の構造の歴史的展開を明らかにしていく。

第五章では、第三、四章で考察されてきた聖なる空間の問題が、沖縄の宗教的伝統における聖なる時間の問題として捉えなおされる。本章では、神歌を神話として捉え、その神歌の儀礼の解釈の中から始源的存在論的次元を明らかにしていく。前半ではまず、神歌の先行研究を一瞥し、宗教学の側からの問題点

を提示する。そして、神歌が神話であることを明らかにし、後半では、具体的な儀礼の神歌から神話として神歌の世界創成論的な側面とそこから解読される存在論的意味を明らかにしていく。

第六章では、神歌が神話的世界を現前させるものであると同時にそれが人間の祈りであるという聖俗の両義性の意味を明らかにしたうえで、御嶽と神歌の関係、沖縄の宗教的伝統の中心的構造について考察していく。

最後に終章において、本論考を要約・総括したうえで、本研究の意義と展望についてふれる。